

# ハンドボールにおける指導に関する事例研究： 2016年度中部大学ハンドボールチームを指揮した2人の 指導者の語りとゲーム分析を手がかりに

富田 恭介<sup>1)</sup> 山下 純平<sup>2)</sup>

1) 愛知教育大学大学院

2) 愛知教育大学

## Case study of handball coaching : based on the game analysis and dialogues through two coaches of Chubu university men's handball team 2016

Kyosuke TOMITA<sup>1)</sup> Junpei YAMASHITA<sup>2)</sup>

1) Graduate school of Aichi University of Education

2) Aichi University of Education

キーワード：ハンドボール指導者，質的研究，比較

Key Words：Handball Coach, Qualitative Research, Comparison

### I. 緒言

大学の指導現場では、最後の大会が終われば4年生が引退してしまうため、大学のハンドボールチームは、1年間でチームづくりを行う。したがって、指導者は1年のスパンで現有戦力を分析し、目標を設定して、トレーニング計画を立て、実際にトレーニングやゲームを行い、評価しながらチームを強化しなくてはならない。また、多くの大学の指導現場では、大学教員や大学職員、または外部コーチなどが専任で1年間チームの指導に当たっている。

筆者が監督を務める中部大学ハンドボール部は、2014年に行われた全日本学生ハンドボール選手権大会で優勝した経験のあるチームである。その中部大学ハンドボール部は2016年7月のシーズン途中に監督が交代した。大学のハンドボールチームで、シーズン途中に指導者が交代することは大変珍しいことである。前任監督である蒲生晴明氏は、2度の男子日本代表監督を務めた経験を持ち、中部大学での18年の指導歴の中で、2014

年の全日本学生ハンドボール選手権優勝の他にも、多くの日本代表選手、日本リーグ選手を育てた実績のある日本屈指の指導者である。筆者は前監督の退任に伴い、この中部大学ハンドボール部の監督に就任した。後任監督である筆者は、昨年度まで日本リーグの実業団チームに選手として所属していたため、指導者としての経験は全くないまま監督に就任した。筆者は2002年から2006年に中部大学ハンドボール部に選手として在籍し、前任監督の蒲生晴明氏の元で4年間指導された経験を持つ。中部大学ハンドボール部の出身者ではあるが、蒲生晴明監督の下でチームづくりや選手の育成といった長年の指導で蓄積した実践知をほとんど伝えられることはなくチームを引き継ぐこととなった。このような状況の中で、蒲生氏がどのような指導構想で2016年度のチームを作り上げたのか、そこにはどんな蒲生氏の指導の実践知があったのか興味を持ったことが今回の研究着手の動機である。

指導現場で指導者を支える知を実践知と呼ぶ。それは個人的、経験的な知識、柔軟で不定形な知

識（ベナー，2004）である。実践知をもっとかみ砕いて表現すると、「私はこうやって選手を育てられる」という知（會田，2016）と言える。指導者は普段、無自覚的に指導を行っているため、この実践知が言葉に表されることはほとんどない。この実践知についての先行研究では、数値に置き換える量的研究だけでなく、テキスト（言葉）に置き換えた質的研究が行われている。

ハンドボール指導者の実践知についてはいくつかの先行研究があり、指導者の熟達化に関する研究（楠本，田代，會田，2015）やコーチング活動の実践知に関する質的研究（會田，船木，2011）などがある。しかし、1シーズンの中で熟達指導者から初心者指導者へとチームが引き継がれた際の、チーム構想や指導方法、指導者の実践知の違いによるチームのゲームパフォーマンスの変化に関する研究についての報告はみられない。

そこで本研究では、大学ハンドボール界を代表するチームの1シーズンにおける、前任監督である蒲生氏が指揮した春季リーグと、後任監督である筆者が指揮した秋季リーグの同一チームでの各全9試合、合計18試合で、チームの戦い方としてディフェンスとオフェンスにどのような変化があったかをゲーム分析及びインタビュー調査によって量的、質的の両面から比較検討し、そこからハンドボールのチーム作りに関する有用な知見を得、今後のハンドボール指導に役立てるための資料を得ることを目的とした。

## II. 方法

### 1. 対象チームおよび対象者

対象チームは、東海学生連盟に所属する中部大学男子ハンドボールチームである。対象者は、そのチームを18年間指導し全国大会優勝経験もあり、以前は全日本男子代表監督を2度務めた経験のある蒲生晴明氏と、2016年7月から蒲生氏に代わって監督に就任したほとんど指導経験のない若手指導者である。この若手指導者は、2016年3月まで、日本リーグに所属するトップチームでプレーし、現役選手時代には約8年間の日本代表選手としての経験を持っている。なお、この若手指導者は、本研究の筆者でもある。本研究は趣旨が

十分に理解されて行われ、研究成果の実名での公開についても了解されている。

### 2. ゲームパフォーマンス分析（量的研究）

#### (1) 調査対象

調査期間は2016年1月から10月までの10か月間だった。この期間を2つに分けて、春季リーグ戦期間と、秋季リーグ戦期間とした。そして、分析対象試合は、前任監督の蒲生氏が指揮した東海学生ハンドボール連盟春季リーグ戦（2016年4月～5月）全9試合と、後任監督である筆者が指揮した秋季リーグ戦（2016年8月～10月）全9試合、合計18試合とした。対戦したチームは春季リーグ戦と秋季リーグ戦ともに同じチームだった。

#### (2) 分析項目及びデータの処理方法

本研究では、各ポジションのシュート（ディスタンスシュート、サイドシュート、ポストシュート、カットインシュート、速攻シュート、7mシュート）及びミスの生起数を求めた。各項目についての全体の攻撃回数に対する比率を求め、春季リーグ戦と秋季リーグ戦を比較するためにフィッシャーの正確確率検定によって有意差の検定を行った。統計処理の有意水準は5%未満とした。すべての統計処理については、SPSSを用いた。なお、分析結果の検討は2名の共同執筆者で行った。この2名はいずれもハンドボールを専門とし、ハンドボールの技術・戦術に精通し、指導者としての経験も持つ研究者であった。すべてのシーンについて分析結果が一致するまで協議した。

### 3. インタビュー調査（質的研究）

#### (1) インタビュー調査の内容および方法

調査の流れとしては、チーム構想についての事前アンケートをもとにして、2人の指導者に対してインタビューを行った。まず、後任監督である筆者が第3者からのインタビューに回答し、その後、筆者が、前任監督の蒲生氏にインタビューを行うという流れである。インタビュー調査の内容は、ディフェンスの際に大切にしていること、オフェンスの際に大切にしていることの2つの項目とした。

インタビュー調査時に各質問に対して容易に回答できるように、インタビュー調査の1週間前に自由記述で回答を求めるアンケート調査票を本人に送付し、自身の指導理論について振り返って記述してもらった。インタビュー調査時にはそれを補助資料として使用した。インタビュー調査は、全日本選手権が行われていたエスフォルタアリーナ八王子の会議室で行い、すべての発言は、ICレコーダを用いて録音した。調査は2016年12月23日に行った。

## (2) テキストの作成と分析

まず、すべての発言内容を逐語録として文章におこした。次に語りの意味内容を理解できるまで朗読した。続いて、語りの意味内容を崩さないように、語りの内容をまとめた。これらの作業は2名の共同執筆者で行った。これらまとめたものを研究の基礎資料とした。

分析については、共同執筆者2名で行った。この2名はいずれもハンドボールを専門とし、ハンドボールの技術・戦術に精通し、指導者としての経験も持つ研究者であった。これらの手続きによって、妥当性と信頼性をもって研究を進めていった。

## Ⅲ. 結果及び考察

### 1. ディフェンスについて

リーグ中の対戦相手のディスタンスシュートの割合が春季リーグ(29%)に対して、秋季リーグ(36%)の方が有意に増えた。

春季リーグを指導した蒲生氏は、相手のディスタンスシュートを増やして、相手のブレイクスルー、ポストシュート、サイドシュートといったクロスシュートを防ぎ、それから戻りを早くして

相手に速攻をさせないというセットディフェンスをする際の基本的な考え方を持っている。さらに、ディスタンスシュートを打たせて勝負するために、真ん中に大きな選手を配置し、できれば大きいゴールキーパーも置きたいと考えている。大きな選手たちを動けるようにして、理論・技術・戦術を教える。そうして相手にディスタンスシュートを打たせて、攻撃成功率を下げ失点を抑えていくという戦略を持っていた。もうひとつが「捕まえる」ことの重要性について、相手が自分の間合いに入ってきたらグツと動けないように捕まえる、これが出来るチーム、選手が日本には少ないと話していた。

秋季リーグを指導した後任監督は1対1、2対2の強さが重要だと考えてる。強さとは相手の動きを封じる個人戦術とグループ戦術、相手を捕まえるコンタクトのことだと言っていて、ディフェンスには様々なシステムや考え方があるが、個人の質が高く、全員がハードワークできるということが、システムや戦術の多様化、洗練化に繋がると考えている。育成年代なので、個人の技術・戦術遂行能力を伸ばしたいと考えてる。また、どんなシステムを使っても、最後は1対1や、2対2の局面になるので、その部分を高めていくことが重要と考えている。

春季リーグと秋季リーグを比較してみた場合、蒲生氏の「相手のディスタンスシュートを増やして、ブレイクスルー、ポストシュート、サイドシュートといったクロスシュートをとにかく防ぐ」というディフェンスの構想が、後任監督と選手に引き継がれ、春季リーグよりも秋季リーグは構想通りにディフェンスの精度が向上したことが示されている。また、蒲生氏の「大きな選手たちをピックアップして、動けるようにしていく、理

表1. ゲームパフォーマンスの結果

	中部大学				相手					
	春季	(n)	秋季	(n)	有意差	春季	(n)	秋季	(n)	有意差
ミス	23%	(571)	21%	(561)		25%	(572)	22%	(572)	
ディスタンス	29%	(571)	22%	(561)	*	29%	(572)	36%	(572)	*
サイド	11%	(571)	13%	(561)		12%	(572)	9%	(572)	
ポスト	7%	(571)	9%	(561)		6%	(572)	8%	(572)	†
カットイン	10%	(571)	15%	(561)	*	13%	(572)	10%	(572)	†
速攻	16%	(571)	15%	(561)		14%	(572)	13%	(572)	
7m	4%	(571)	4%	(561)		2%	(572)	2%	(572)	

\*: 春季と秋季の間に5%水準で有意差があることを示す †: 有意傾向であるP<0.1

論・技術を教え、戦術を教える」という語りと、後任若手監督の「1対1、2対2の強さです。強さとは相手の動きを封じる個人戦術とグループ戦術」「コンタクト」を大切にしているという語りは同義である。つまり、シーズン開始から継続したディフェンストレーニングによって、春季リーグに比べて秋季リーグは個人のディフェンス技術や戦術遂行能力が向上したと考えられる。

## 2. オフェンスについて

ゲーム分析結果では、リーグでのディスタンスシュートの割合が春季リーグ（37%）に対して、秋季リーグ（28%）の方が有意に減少し、カットインシュートの割合が春季リーグ（12%）に対して、秋季リーグ（19%）の方が有意に増加した。

春季リーグを指導した蒲生氏は、セットオフェンスはミスをしたくないことがもっとも重要だと考えている。いかに確率の高いシュートを打つか、ブレイクスルー、サイドシュート、ポストシュート、速攻シュート、7mシュートを枠の中に入れるか、そのシュートまでの行程でミスを減らすことが一番重要だと考えている。また、テンポを上げればミスは増える。テンポを下げればミスは減る。なので、攻撃の回数が増えればミスも増えて、攻撃の回数が減ればミスも減るという考えを持っていた。

秋季リーグを指導した後任監督は、こだわりたいプレーは平行とクロスプレーであると言っていた。正確で早いパス回しと、正しいポジショニング、1対1や2対2のスペースを如何に作り出し、縦に強く攻め込んでラインを突破していきけるかが重要だと考えている。

春季リーグと秋季リーグの比較してみた場合、後任監督の「1対1や2対2のスペースを如何に作り出し、縦に強く攻め込めるか」という考えのもと、ディスタンスシュートが得意な選手よりも、1対1の突破力や、パスの展開力のある選手、グループ戦術を組める選手を、多く起用していたということが考えられる。また、もう一つの理由としては、蒲生氏が語っていた「いかに確率の高いシュートを打つか、ブレイクスルー、サイドシュート、ポストシュート、速攻シュートに繋がられる

か」というオフェンスの考え方を、後任監督と選手が引き継ぎ実践し、当初のオフェンス構想どおりにチームが成長していったと考えられる。

## V. まとめ

本研究では、1シーズンにおいて熟達指導者と若手指導者の2人の指導者が率いた同一チームにおいて、セットディフェンスとセットオフェンスでチームの戦い方にどのような変化があったかを量的、質的に調査することで、2人の指導者がチームに与えた影響の要因を明らかにすることを目的とした。その結果、①指導者が変わっても前任監督の考え方がチームと選手に浸透していた、②前任監督の構想を後任監督も引き継ぐことでチームは成長した。今回はディフェンスとオフェンスの局面に限って比較検討を行った。今後は、その他のゲーム局面の分析や、前任監督のチーム構想や理念についてもさらに深めて明らかにしていくことが必要であると考えている。

## VI. 参考文献

- 會田 宏 (2016)：スポーツ科学はコーチング実践に役立っているのか、日本ハンドボール学会第4回大会基調講演、ハンドボールリサーチ4、86頁
- 會田 宏、船木 浩斗 (2011)：ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究：大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに、コーチング学研究
- 金井 壽宏、谷口 智彦 (2012) 第3章実践知の組織的継承とリーダーシップ、金井 壽宏、楠見 孝編、実践知—エキスパートの知性、有斐閣：東京、65頁
- 楠本 繁生、田代 智紀、會田 宏 (2015)：ハンドボールにおける卓越した指導者の指導力の熟達化に関する事例研究：高校・大学において全国大会で17回優勝している監督の語りを手がかりに、ハンドボールリサーチ4、11頁
- ベナー (2004)：早野真佐子訳エキスパートナースとの対話—ベナー看護論・ナラティブス・看護倫理、照林社：東京